
天気雨

向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天気雨

【Nコード】

N1702Y

【作者名】

向日葵

【あらすじ】

バスケットボールが好きな、日向雨月と蝶田剛。

ある日蝶田剛に母の再婚によって新しい家族が来ることになった。その新しい家族である蝶田剛の妹と日向雨月が……………。

1話 友達の新しい家族

「まだまだ甘いな。日向雨月くんよ。」

「うっせーよ。中学生MVP男。」

受験が終わってからいつも俺は中学生MVP男の蝶田剛と

ちようただたけし

こいつの裏庭にあるバスケットのゴールを使って1対1をしている。剛にはたまに勝てるが100回やれば95回くらい負ける。それくらい強いのである。

「ちょっと一回休憩。」

剛がゴールの横にあるベンチの右側に座った。

「おいおいもう休憩か?」

と言いながら俺は余った左側に座った。

「いやっ、ちょっと真剣な話していい?」

「いいよ。別に……。で、何なの?」

「俺ってさあ、生まれた時にはもう父さん事故でいなかっただろ? それでさ、」

剛は一回間を空けた。

「母さん、どっかの会社の社長と再婚することになって。」

「おお、良かったじゃん。」

剛はバスケットボールをいじりながら

「それだけじゃなくて、確か中2の、その、、妹が出来るんだよね。」

と顔を赤らめて言った。

「つまり、お前の再婚相手の娘ってことだろ？」

「まあそうなるな。俺と逆で新しい妹のほうは小さい頃に母親を亡くしたらしいんだ。」

「今日って、3月20日だよな？」

俺は剛に睨みつけるようにきいた。

「？ そうだけど」

「いつ新しい妹と父さんくるの？」

「3月24日。に妹が来て、27日に新しい父さんがくるって。なんか社長さんはいろいろ忙しいらしいよ。」

「じゃあさ、24日に新しい妹歓迎パーティーしようぜ！」

俺は3pラインより後ろからシュートを打ちながら剛に言った。

「別にいいよ。」

シュパツという音が夜の空に響いた。

「あれ？そういえば名字って変わるの？」

「あ、おお。忘れてた。奇跡的なことにさ、お互いに蝶田って名字なんだ。」

剛は笑顔で言った。

「すげー奇跡だな。」

剛は空を見上げた。

「んじゃもう暗くなったからまた明日な。」

「おう！じゃあな。明日は負けねーぞ！」

「ファイトー。じゃあな。」

この言葉のどこかに俺は負けれないという余裕な感じがあった。

「家族。かあ。」

その独り言は夜の空に吸い込まれていった。

1話 友達の新しい家族（後書き）

初投稿です。

忙しい年なのでいつ投稿出来るか分かりません。

とりあえずよろしくお願いします！（笑）

2 親友 剛

朝6時俺はカーテンから漏れる光にそつと起こされた。まずはじめにカーテンを開けた。

そして目覚ましと窓越しの空を見て、

「3月21日。今日は晴れ。。。と」

と言った。

そして、朝食を作り台所へむかった。

普通の家庭では朝起きたらテーブルの上にもう朝ご飯があるだろう。

しかし、俺の両親は、俺が小学生の時に交通事故で死んだ。

小学生にはまだ早い、7000万という資産を残して。

両親が死んだ、一週間後にその悲しみを背負いながら、暗い雰囲気
で学校へ行った。

そこでその時まであまり仲の良くなかった剛が

「俺さ、生まれた時からもう父さんいないんだけどさ、二人の親から育てられたってすごく幸せだと思うんだ。確かに俺にはまだ母さんがいるけど、雨月は二人共いた分、俺の2倍の愛を受け取ったってことになるだろ？」

俺の横に来て、励ましてくれた。俺は無表情で一度頷いた。

「だから、約束してくれ。今日はさ、そんな感じでもいいけど、明日からは笑顔でいてくれないか？」

よくそんなセリフ恥ずかしがらないと言えるな。と思ったが両親の

ことを考えたら、俺は笑顔でいなくてはならないと思った。

「そうだな。ありがとう。」

と、笑顔で言った。

まあその時から俺らは知らないうちに親友になった。

なんてことを考えている内に、テーブルの上に、ご飯と卵焼きと、野菜と肉でできた炒めものを並べた。

その朝食を食べ、みじたくを済ませ、約束の8時に剛の家に着くように家を出た。

裏庭のバスケットゴールにもう剛がいた。

俺は剛に

「バスケットボール星人が、はやすぎんだよ。」

といった。

そしたら剛がボールを指の上で華麗に回しながら、

「よし。早速1対1すっか」

と言った。

俺は

「おう今日は負けねーぞ！」

と言いながら負けずに華麗にボールを指の上で回した。

剛はそれを見て、少し笑った。

「んじゃ俺先攻ね。」

剛が言った。目はもう真剣だ。

そして俺がボールを渡して1対1が始まった。

剛は右に行くと思せかけ、左に行くという単純なフェイクに超人的なスピードをつけて俺を抜き去りシュートを入れた。

「くそつ、次は俺の番だ。」

と言って、剛からボールを受け取った。

その瞬間に俺は3pを打った。

剛が反応出来ないくらいの速さでいきなり打った。

そのシュートは美しい弧を描きながら、ネットに吸い込まれていった。

「どおだ!」

と笑いながら俺は言った。

「今日は違うようだな。てかロングシュートはいりすぎ、お前」

「それだけが160センチの俺のとりえだからな」

「よし!もっかいだ。」

剛が嬉しそうにいった。

そんなこんなで、続けていたら、いつの間にか午後4時になっていた。

「やべー。昼飯食ってねー」

と言い、近くのコンビニに行った。
コンビニで昼飯を買い、裏庭のベンチに座った。
そして俺は、

「そいえばさー、剛ー、もう新しい家族に会ったの？」
と聞いた。

「そんなこと聞くか？普通もう会ってるだろ。」
「何回会った？てかどんな感じだった？」

質問攻め状態のスタートだ。

「2回かな。父さんの方は優しくていい人そうだった。母さんが言うには性格が俺の死んだ父さんと似てるらしい。んで、妹の方は、いいやつそうなんだけど、不思議さ？もある感じ。でも人なつっこ
そんな奴だった。」

「じゃあさ、お前は新しい家族のことどう思ってる？」
「最初は嫌だったけど、会って見たら逆に早く一緒に暮らしたくなるような人達だった。」

「パーティーどうする？」
「お前が言い出したことだろ。まあいいや。俺はさ、もう一人くらい誘った方がいいと思う。」

「誰？」
「話上手なー」
「東幹雄あずまみきお！か？」
「うん。あいつでいいだろ？」
「いいんじゃない。」

空を見上げた。

話をしているうちに外はもう暗くなっていたようだ。

「じゃあな、外ももう暗くなってきたし。」

「そうだな。じゃあな。あっそうだ！明日用事あって遊べないわ。」

「

「まじかよ。わかった。じゃあな。」

「なんか俺も楽しみになってきたな。」

「今日も独り言を言ってしまった。」

「どうやらクセになってしまったようだ。」

3 明日の準備

どうしよう。俺は剛の妹歓迎パーティーで何をすればいいのか悩んでいた。

「とりあえず東にメールすつか。」

俺「剛の妹歓迎パーティーなんかいいアイデアない？」

東「普通にごちそう並べてみんな楽しんでるのがいいと思う。」

普通すぎだろ。まあそれもいいか。

俺「だよな。んでさ、あいつバスケットうまいだろ？だからそれを見せようと思うんだけど……………」

東「いいんじゃない。じゃあまずは裏庭で3人でバスケしてたらいいんじゃない？んで、妹来たら雨月と剛で派手な技見せればいいんじゃない？」

俺もなんかやんのかよ。

俺「いいんじゃない3連発かよ（笑）。妹さん裏庭来るかな？じゃあお前いい感じに玄関から裏庭に招待して。任せたぞ！」

東「おお！任せとけ。うまいごちそうはお前作れよ！」

さすが！頼りになるな。おしゃべりさん。

俺「わかった。ありがとう。じゃあまた明日。8時剛んち集合な。

「東「はいよー。んじゃ〜。」

「ねむっ。」

俺は携帯を閉じ、眠った。

翌朝俺は、1通のメールに起こされた。

剛「おーい朝だぞお。」

やべっ！もう10時じゃん。

俺は急いでジャージに着替えて、朝食を食べずにボサボサの髪で剛の家の裏庭に向かった。

「ゴメン！寝坊した。」

東は呆れた顔と笑顔を混ぜ合わせたような顔で

「遅すぎだーい。お寝坊さん。髪の毛爆発してるぞー。」
と
「朝からテンションたけーよ。」
と
「ひどいよお。朝から撃沈……。」

シュートを打ちながら剛は

「雨月遅れたせいで2時間もこの地獄を味わってたんだぞ。」
と聞いた。

「お前までそう言うのかよ……。わかったよ。黙ってりゃいいんだろ。」

東は笑顔とふてくされた顔を混ぜ合わせたような顔で言った。

「なあ剛ー。そういえば何時くらいに妹くんの？」

俺も早速シュートを打ちながら聞いた。

「10時っていった。引っ越しの車は14時だとさ。」

「ん？てことーは、俺ーは9時40分ぐらいーに玄関に行けばいいんだな。」

東はベンチに座り缶ジュースを開けながら言った。

すると剛は東に

「何で玄関にいくんだ？」
と聞いた。

「ああ、言うの忘れてた。昨日雨月とメールでき、まずはお前の超うまバスケットを妹ちゃんに見せつけようって話してた。」

東はピースをしながら言った。

「はあ？マジで？まあ確かに俺をわかってもらう一番いい方法かも
しんないけど……………」

剛は何ともいえない表情をしている。

俺は剛に

「頑張れよ。おにーちゃん。」
と冗談混じりで言った。

「そついえば妹ちゃん何て名前なんていうの？」

東は飲み干した缶ジュースの缶を踏み潰しながら聞いた。

「陽。蝶田陽。（ちようだよう）」

剛はシュートを外した。

「そついえば俺も初めて妹の名前聞いた。」

俺はシュートを入れて言った。

「ああそついえばそうだな。何で雨月に言わなかったんだろつ。」

こんなことを話している内にもう3時になってしまった。

「ゴメン！俺明日の準備するから。んじゃねー」

俺はそう言って家へと帰った。

家につき悩んだ。

明日、何を作ろうか。

悩んでもしょうがない。

まずは作ると決めていたケーキをつくらう。

俺は材料を取り出し、まずはスポンジを作り上げた。

小さい頃に母さんと作った、グシャグシャの、お父さんにあげた誕生日のケーキを思い出す。

あのときは生クリームをつけるとき母さんは全部俺に任せていた。

「そのほうがきつとお父さんも喜ぶから。」

母さんが言っていたこの言葉の意味はきつと綺麗なものより愛のこもった不格好なものの方がいいという意味だろう。

まあその言葉の通り、父さんは目に涙を浮かべていたが。

今の俺が作ったケーキは自分でいうのもなんだがとても綺麗な。

いいことなのか。それとも、よくないことなのか。

俺にはわからない。

ただ、俺は不思議な気持ちになった。

そしてケーキの上にイチゴをのせた。

「これでケーキは完成だ。」

次は……。と。

今作ると明日にはもう美味しくなくなるから、あとは明日作るか。

俺は近くのスーパーに行き、ケーキを作っている時に思いついた料理の材料を買い、冷蔵庫に入れてから、ベッドに転がり、寝た。

明日は4時に起きよう。

目を閉じると母さんと父さんの顔が浮かんできた……………。

陽歡迎パーティー1

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

俺はセットしておいた目覚ましの音に起こされた。

俺はカーテンを開け、台所へ向かった。

そして冷蔵庫を開け、昨日買っておいた、いろんな食材を調理しはじめる。

それらの食材は俺の手によって3時間で唐揚げとエビチリと回鍋肉とピザになった。

正直4人だけなのに作りすぎてしまった。

一人では運べないから剛と東を呼んだ。

俺は二人を待っている間にみじたくを済ませた。

ピンポン。

「おーっすう！雨月。お、なんかいい匂いすんな」

「おいおい不用心だな。鍵かけてないのかよ。」

東と剛がきた。どうやら一緒に来たようだ。

そしてそういえば、鍵なんてものは1日以上家を空けるとき以外はかけていない。

俺は早速二人に

「じゃあ東は回鍋肉とエビチリ持って。俺はケーキとピザ持つから。んで、剛は作りすぎた唐揚げ持って。」

と指示をした。

東は

「俺一番重てーじゃん」

などとぶつぶつ言っていたが朝からウザいから剛と一緒に無視をした。

これを暗黙の了解というのだろうか。

朝は東がウザいから無視する。という。

そんなこんなしている間に剛の家に着いた。

まず、料理を剛の家に置くために家の中へ入った。

剛の家に入ってから剛がなんかそわそわしている。

そしてパーティー会場となっている剛の部屋を開けると、様々な飾り付けがされてあった。

新しい家族の陽。よろしく！

と大きい紙に書かれているものもあった。

それを見て俺と東は口をそろえて

「ホントに楽しみなんだな」

と半分茶化すように言った。

そしたら、剛は俺らのほうを見ずに
「新しい妹だぞ！楽しみじゃない訳ないだろう。」
といった。

剛の部屋にある鳩が出てきそうな時計の短い針が9時と10時の間
をさしている。

俺は慌てて

「やべもつ30分したら来るかもしれないぞ」
といった。

東と剛も

「やべー！」

という顔をして急いでそれぞれの持ち場に着いた。

東はやるときはやる男だ。

それは俺と剛がよく分かっている。
東に陽の誘導係を任せて良かった。
普段はウザい東が玄関へ向かうとき少し頼もしく見えた。

俺と剛も持ち場である、裏庭のバスケットゴールの場所へ行った。

さっきから剛はほとんどしゃべっていない。

緊張しているのだろう。
と考えているときに剛が打ったシュートがリングの真ん中を突き抜
けた。

思わず俺は

「おいおい、緊張してるのによくそんなに正確なシュートが打てる

な。

もう陽もお前にメロメロだな！」

と言ってしまった。

そしたら剛は、

「メロメロまではいかないでいいけど、これをきっかけにもっと仲良くなるりたいな。てかもう呼び捨てかよ」

と俺にギリギリ聞こえるような声でいった。

「カッコイイ技考えといたか？」

俺は剛に聞く。

「まあまあ楽しみにしてろって」

と剛は答えた。

ボールが地面につくときの音、ボールがネットを突き抜ける音の中に俺の携帯の着信音が混ざった。

「東からだ。」

剛は

「なんて書いてある？陽がきたのか？」

と気になっている様子で聞いてきた。

「陽ちゃんばいのキタヨン（笑）。だとさ」

剛は

「やべー緊張してきた。」

と言っていたが俺は

「前に2回会っているんだろ。なんでそんなに緊張すんだよ」と聞いた。

「あん時は10分ぐらいずっとしか話してないんだよ。それに、家に来るってなったら緊張すんだよ！」

東はビミョーな顔をして言った。

俺はそういうもんなのか。と思った。

足音が聞こえる。

ガサガサ、ガサガサ、。

俺と剛は顔を合わせる。

ガサガサという音は大きくなってきた。

声も少し聞こえる。

そして、東と陽ちゃんの姿が見えた。

俺は、バスケットを一回やめ、二人のもとへ行った。

剛は約束通りバスケットをしている。

さっきからなぜか陽にガン見されている気がした。

気になったので顔を合わせてみた。
すると、

「あつ、はじめまして。蝶田陽です。えっと雨月君で合っていますか？兄から多少のことは聞いたんですけど。」

といい、中くらいの高さのおじぎをした。

「うん、合ってるよ。よろしく！」

俺は一瞬、何故か目をそらした。

パツと見、結構可愛い。

髪の毛は若干長め。

などと考えているときに、なんか話題を出さないと、と思った。

剛のほうを指でさし、

「新しいお兄ちゃんの剛、バスケットうまいんだぜ。大会でMVPとるくらい」

といった。

陽ちゃんは

「えー！知らなかったです。ちょっとみてみたいなー」

と興味深々で目が輝いている。

俺は剛に

「おい剛、ほら凄い技見せるよ！」

と大声で言った。

剛は

「おう、あまりにもよぶの遅いから忘れられてるかと思った」

と呆れ顔をしている。

「じゃあ、凄いかわかんないけど、凄いと思うことやります！」

剛はドリブルをつき始めた。

「……………その時、俺は剛ではなく陽のほうを見ていた……………」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702y/>

天気雨

2011年11月10日03時05分発行